



佐々木 晋 (団長・テナー)

一番印象に残っている先生は、小学校3-4年生の時の担任の先生です。小柄でちょっとびっくりかわいいタイプの女性の先生でした。先生は大学を卒業したばかりで私たちが初めての教え子でした。教育理念が明確で、グループ学習と読書に特に力を入れており、子供向けの良書をたくさん紹介して頂きました。近年映画化されている「ナルニア国物語」も紹介され、夢中で読んだものです。授業は教科書をあまり使用せず、生きる上での基本的な考えをたくさん学びました。特に大事にされていた考え方は「常に相手の立場で考える」でした。その効果か、いじめもそのクラスでは少なかったように思います。先生の熱心さが伝わったのか、新卒の先生に疑心暗鬼だった母親同士の仲が良くなり、いまだに月一回の集まりがあります。一昨年は先生を囲んで母親も含めたクラス会を開きました。いい出会いといい仲間は一生ものです。これからも大切にしていきたいと思っています。

神尾 昇 (指揮者)

私がなぜ音楽家になったか、というのがまず「私の先生」にまつわる話になると思います。私には姉がいて、私が物心ついた時にはピアノを習っていました。そして私もピアノを習いたい、と幼稚園児の時に申し出たら、父の返事は「小学校に上がってから」というものでした。そしてピアノを習い始めたのが最初の音楽との出会い、ということになるでしょう。そのピアノの横山先生には中学生まで習っていました。一方で私の小学校は音楽教育が盛んで、小学校にオーケストラ部があります。そこの顧問兼、音楽の先生として来られていた岡野先生という女性の先生も強烈でした。授業でフランツ・リストの「ラ・カンパネラ」を弾いて下さったのですが、今でもあの演奏を覚えています。そして私は中学校、高校と吹奏楽をやる事になるのですが、紙面の関係で今回はその部分は省きます。私の音楽への方向性を決定づけた先生方を列挙しますと、最初のピアノの横山先生、小学校の音楽の岡野先生、中学校の音楽の先生であった空井先生、岡先生、三木先生、竹内先生、高校の音楽の先生であった前田先生、松繁先生、ピアノの先生であった大町先生、歌の先生だった曾我先生、大学声楽科時代の鈴木先生、指揮科時代の佐藤先生、高階先生、などなど紙面に書ききれませんが、本当に多くの先生にお世話になって今があるんだなあ、と今さらながら感慨深いです。

「お正月は、今年のお正月、懐かしい思い出のお正月について四人のメンバーから寄せていただきました。」
年の初めの例として、シヨクラ通信「お正月特集号」です。
《わたしのお正月》は、今年のお正月、懐かしい思い出のお正月について四人のメンバーから寄せていただきました。
シリーズ《わたしの先生》はついに真打登場！ 我らが先生・神尾昇氏と佐々木晋団長です。



自己発見したお正月 若林 良 (テナー)

禁煙を始めました。日ごろの不徳がたたったのか、僕は晦日から翌年の3日まで高熱に倒れました。禁煙というのは、3日、3週間、3ヶ月という切れ目が一番辛いといいます。なしくずしに3日超えたからこのままいけんじゃね？と禁煙開始。吸わずにいと、自分の中でのタバコの役割、ストレスのことがわかるようになってきました。僕はニコチン中毒だったわけではなく（本数少なかったし）、瞬間的なストレス解消の手段としてタバコを嗜んでいたらしいのです。なので、これはガムとかごはん、デザートで置換可能。そして、ストレスを感じる（タバコが欲しくなる）タイミングですが。仕事（漫画）ではそんなに感じないのに、人に会うとき、メールや電話を返さなければと思う時にストレスが急上昇…。コミュ障一歩手前のダメ人間ぶりが、このお正月に明るみに出ました。残念！

ふるさとでのお正月

古川 智久 (バス)

毎年年末年始は福島の実家に帰り過ごしています。そばを食べ、紅白を見て年を越し、翌日は初詣に行く、といったよくある年末年始の過ごし方といった感じですが、一昨年に結婚してからは、妻も一緒に福島で過ごすことになったため、前よりもにぎやかになった気がしています。また、毎年お正月には高校時代の合唱部の同期会があり、卒業してだいぶたった今でも8割近い人数が参加しています。ずっと福島で暮らしている人から、普段はほかの場所においてこの時期だけ帰ってくる人までいろいろですが、それぞれが近況を話したりして、旧交を温めています。たまにしか帰らないふるさとや、たまにしか会えない友人たちですが、変わらないもの、変わっていくものがそれぞれあるということを実感するお正月となっています。

ボケてられないお正月

赤司 美苗 (ピアニスト)

近頃は毎年「大晦日は丸ビル第九！」と決まっています。年の瀬は慌ただしく過ごし、その反動でお正月はだらだらとしてボケてしまっていたのですが、今回はまず年の瀬の本番が無く、普段出来ない大掃除なども出来、ものすごく穏やかに過ごす事が出来ました。しかし赤子にとっては年末年始などどこ吹く風。結局普段と全く代わり映え無く過ごす事を余儀なくされた訳ですが、お陰様で正月ボケは回避出来ました。笑。ちなみに、娘に戴いたお年玉はちゃんと娘の銀行口座に預金しましたよ！笑

正月元旦に予期せぬ意外な人に声をかけられて

服部 昭光 (テナー)

私は26歳の初夏の6月初旬の週末夜行列車で上京しました。大学の後輩宅に半年もの間、アパートに同居して将来のことを考えて就職することにしました。名古屋に帰る気持ちはありませんでした。

12月中旬には就職も決まり、その後結婚し家庭を持ち子供を2人授かりました。正月元旦に公園でキャッチボールをしていたら私の背後から突然、私の名前を2、3回呼んでいるように聞こえてきましたので、後ろを振り向いたら思いもしなかった懐かしい社長の姿でした。お聞きしたら、最近公園の近くにマンションを購入し、引越してこられたとのこと。新年の挨拶回りの途中で余り時間がなく話せないし、近々に上京する予定があるのでお会いする約束をして、ご迷惑をおかけしたことを謝罪しました。その後、東京でお会いして上京した経緯と名古屋に帰らなかった心情を話して了解されました。今まで18年もの間、胸につかえていたものでとれてホットしました。

童謡メドレー「いつの日か」
の中にも若い団員の方は知らない曲もあることだろう。“からす”や“狸”はまだしもなぜ“くた”が出てくるか。いわゆる文部省唱歌を音楽の授業で覚えただである中高年の私としても“月の砂漠”をいつ歌ったのかはつきりしないが、幼稚園から小学校へ入ったかくらいの頃と思う。アンデルセン童話やグリム童話の背表紙や足踏み！オルガンでバイエルを習ったことなどがぼんやりと記憶にある。今回の編曲では一番のみだが、二番には王子様とお姫様が出てきて月に照らされた砂漠を、だまって行きました、と幻想的である。作詞者の加藤まさをは、大正・昭和前期に『叙情画』という絵を描き功績をなしたとのことで、絵に童謡を添えた詩画集を出版したそうである。そして実は彼の幼少期は病弱で絵をかくことに熱中した由。しばしば千葉県の御宿に療養に出かけていたのだらかな砂丘が続いているところから「月の砂漠」のヒントを得たのだそうだ！（三葉）

編集後記 2013. 1. 17

♪ 土曜日の夕方かなり久しぶりで熱が出た。薬を飲んでいたので寝る前には微熱に下がったが、家には92歳の義母もおり、パートで介護ヘルパーもしているので翌日昼、救急病院で検査してもらった。結果は(-)だったがまた夕方から発熱。なんか怪しい。私の直前は高校生の女の子とお母さんが診察室へ入っていった。36.5度だがインフルエンザだったと若い先生は教えてくれた。病院を出て向かい側にあるマルエツへ行くとその女子高生とお母さんが出ていくところだった。これで流行ってるんだ！と妙に納得した。（三葉）

♪ 編集子の故郷は秩父市と長瀨町の間にある「皆野 (みなの)」という町。5, 60年前の秩父は〈関東の秘境?!〉と言われるほど不便で素朴で古いしきりも残っていた。正月で思い出すのが正月飾り。飾りつけは家長の役目であった。中でも懐かしいのは神棚飾り。藁で編んだ縄を神棚の端から端に渡し、縄目に昆布、スルメ、みかん、かち栗などを吊るす。それは小正月まで飾っておく。“清く貧しく”を絵に描いたようなお正月ではあった。(Kobo)